

インゲンマメのGA処理栽培について ～反収・5トンを目指して～

○喜舎場泰明・名嘉将吾・宮城昭夫・坂本守章

(県立農業大学校)

インゲンマメは平成2年に4,500トンの生産量をピークに年々減少の傾向を示し、平成17年は2,090トンと約半減の収穫量となっている。その原因は、生産農家の高齢化と後継者不足による栽培面積の減少が大きな要因と考えられ、その対策が急がれている。

農業大学校では平成17年度からインゲンマメの生産振興を図るため、わい性のインゲンマメのジベレリン(GA)栽培技術の確立に取り組んできた。

幼苗期のわい性インゲンマメにGAを散布すると、節間が伸長して節に光線が多く照射されて不定芽が多く形成され、長期栽培が出来ることが確認されている。また、草丈が伸長することで収穫作業に負担が少なく、収穫作業が楽に出来る利点がある。

本プロジェクト研究は、インゲンマメの促成栽培を行い、価格の高い冬春期に安定した生産を得るための栽培技術について研究を行った。

材料及び方法

校内の鉄骨ビニールハウス(間口8m×奥行36m)の2連棟ハウスにおいて“キセラ”品種を供試し、栽培を開始した。播種は平成17年11月3日、平成18年10月30日、GA処理は播種後7～8日後に5ppmで株全体に散布した。

施肥量は基肥で有機684(15kg/N)、油かす(5kg/N)、化成804(10kg/N)を施与し、追肥は収穫開始から住友液肥2号を1.8kg/Nを1回/月の割合で行った。

栽培方法は畦幅1.6m、株間0.4mの2条植を行い、平成17年は1穴2株、平成18年は1株仕立て栽培を行った。

結果及び考察

1. GA処理後、10日目までは1日当たり9～11cm程度で伸長し、H17は処理後20日でとかなり高い伸長を示した。H18年は処理後のハウス内の高温によってH17に比べて伸長が低い値となった(図1)。
2. H18年度は11月下旬から天候が良く、播種後48日目から収穫が開始され12月に464kgと順調に収穫が得られた。H17は2月に収穫が落ち込んだが、H18は各月とも順調に収穫が行われ4.4トンの収量が得られた(図2)。
3. H17に比べてH18は約500kgの収量の増加が得られたが、その要因として、12月の好天と1穴1株に仕立てたため生育中期からの草勢が1穴2株に比べて勢いが優れているように観察された。
4. 価格は、H17年は1月～3月が1,000円以上となったが、H18は12月～2月が1,000円以上となり、3月以後はH17に比べて単価安となった(図3)。

以上の結果、1穴1株栽培でGAの効果を確実にし、栽培技術の改善(摘葉等)を行うと5トンも可能と考えられた。

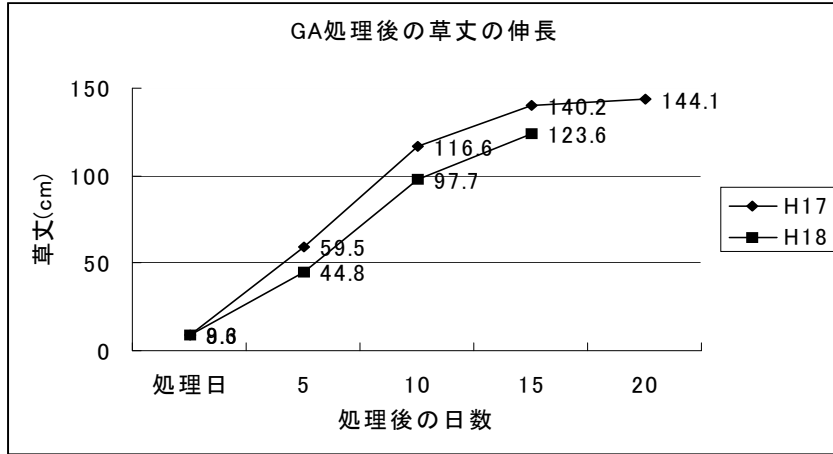


図1 GA処理後の草丈の伸長.

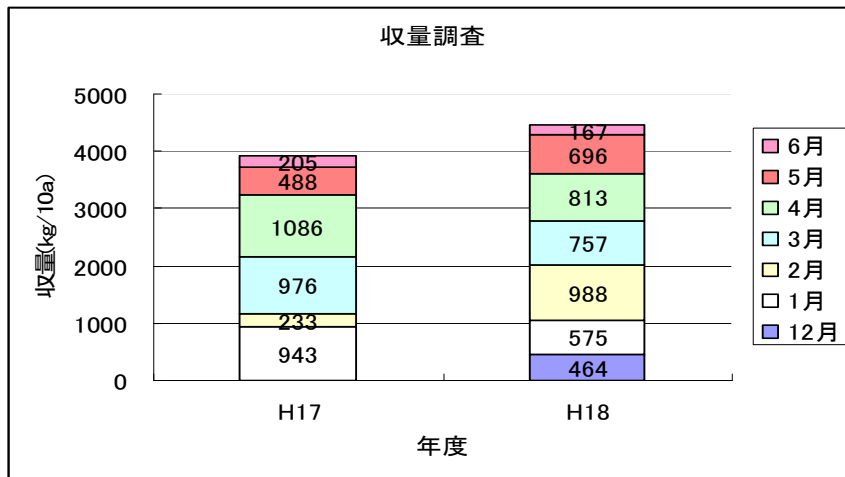


図2 収量調査.

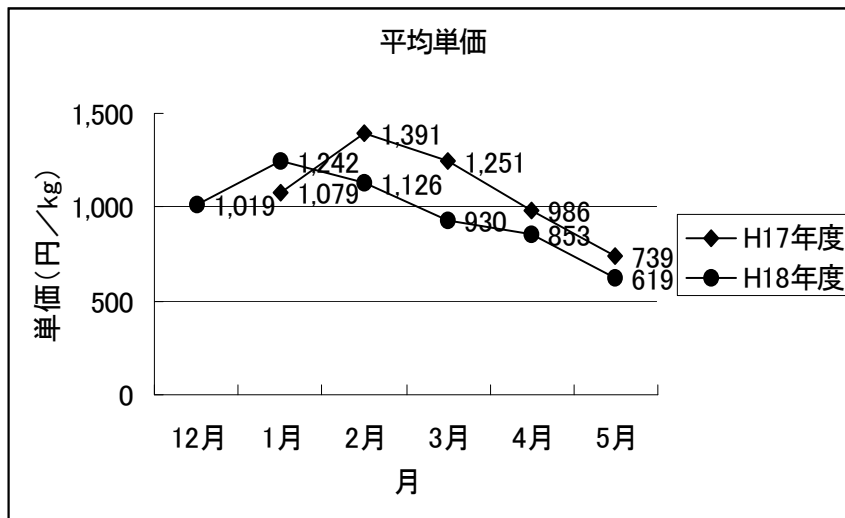


図3 県外出荷平均単価 (キセラ).